

第30回日本受精着床学会

2012.08.30-31 大阪

妊娠予後を指標とした甲状腺刺激ホルモン (TSH) の検討

医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

河野恵美子、大西 洋子、中山奈央子、
市橋 佳代、佐藤 学、赤松 芳恵、
前沢 忠志、姫野 隆雄、井上 朋子、
伊藤啓二郎、中岡 義晴、森本 義晴

【目的】甲状腺疾患は軽症も含めると成人女性 20 人中 1 人の高頻度でみられ、特に甲状腺機能低下症では、月経異常による不妊や流産を増加させることが指摘されている。また、遊離型甲状腺ホルモン (FT4) は正常だが甲状腺刺激ホルモン (TSH) がやや高値を示す潜在性甲状腺機能低下症でも同様の指摘がされ、妊娠前の診断・治療が勧められている。当院の TSH 基準値は一般的な $0.5\sim 5.0\mu\text{U/ml}$ を用いており、殆どが甲状腺機能正常と診断されている。今回我々は妊娠を希望する女性の TSH 値の基準値を見直すべく、TSH 値と妊娠率・流産率の関係を調べた。

【対象と方法】甲状腺機能スクリーニング検査において血中 FT4、TSH の値が基準値内にあり、かつ 2008 年 1 月～2010 年 12 月に当院にて 35 歳以下で胚移植を実施し、染色体異常が原因で流産した周期を除いた 471 周期 (新鮮胚移植 134 周期、凍結胚移植 337 周期) を対象とした。TSH 値 $2.5\mu\text{U/ml}$ 未満の低値群 (356 周期) と TSH 値 $2.5\mu\text{U/ml}$ 以上の高値群 (115 周期) に分け、両群間での移植後の妊娠率・流産率を比較した。

【結果】妊娠率は両群間で有意な差を認めなかった。(高値群 46.1% vs. 低値群 43.0%, $p=0.559$) 流産率は胎嚢が確認された 206 周期において、高値群は低値群に比べ有意に高かった。(26.4% vs. 14.4%, $p=0.047$)

【考察】甲状腺ホルモンは殆どが蛋白質と結合した状態で血液中に存在し、そのごく一部が遊離型として作用する。TSH はこの僅かな遊離型甲状腺ホルモンの変動に鋭敏に反応しフィードバック機構が作用する。今回、甲状腺機能正常といわれている不妊患者でも TSH 値が $2.5\mu\text{U/ml}$ 以上だと妊娠率は変わらないが、流産率は高くなることが示された。これは妊娠初期に必要な甲状腺ホルモンが十分でない為、妊娠の維持が出来なかった可能性が考えられる。今回の結果をふまえ妊娠を希望する女性の TSH 基準値の見直し、TSH 値のコントロールなど検討していく必要があると考えられた。